

双筆の 短編集



著 不動カズりんご
みやみやみや鋼

目次

お題 一本の煙草	
「煙草とホームレス」 不動心りんご	3
「一本だけなら」 みやみやみや鋼	5
お題 カレーライス	
「半分この後味」 不動心りんご	9
「カレーライス」 みやみやみや鋼	11
お題 馬	
「役目を終えた時」 不動心りんご	15
「馬、人、星」 みやみやみや鋼	16
お題 弾丸	
「隊のもっとも悲しい日」 不動心りんご	19
「弾丸」 みやみやみや鋼	21
お題 FPS	
「楽しいFPS」 不動心りんご	25
「銃を置くまで」 みやみやみや鋼	27
お題 潜在的恐怖	
「恐れと畏れ」 不動心りんご	31
「宇宙人の証拠」 みやみやみや鋼	33
お題 歓び	
「歓呼の歌声、届けこの声」 不動心りんご	37
「自由と喜びと」 みやみやみや鋼	39
お題 海	
「少年と海の神様」 不動心りんご	43
「海と太陽と」 みやみやみや鋼	46
お題 かもめ	
「鳥に生まれた」 不動心りんご	49
「北から来たかもめ」 みやみやみや鋼	51

終わり

..... 55

お題 一本の煙草

「煙草とホームレス」 不動心りんご

奇跡か幸運か、または神様の思し召しであったのか。私は戦争を生き延びることが出来た。

戦地帰りの男達は、揃いも揃って心の中に大きな傷を負い、親友や、家庭や、職を失っていた。

私もその例外ではなく、精神が殺人マシンへと変り果ててしまった私のもとから、妻と二人の子供らは去っていった。これは珍しい話ではなかった。

神よ、私が悪かったのか。祖国が始めた戦争そのものが悪いのか。私は生きるために必死に戦い、やっとの思いで命ある状態で終戦を迎え、捕虜収容所での酷い扱いに耐えて、今こうして祖国の地を踏んでいるのだ。

それで、どうだ。このザマは。街に行く者達からは、復員兵と分かるとすぐに睨まれる。戦場で行なわれた非人道的な作戦や蛮行が世界中で報じられたからだ。

私は国のために戦い、国の皆からゴミのような扱いを受けている。

今もこうして、ゴミ捨て場から拾った煙草の箱さえも有難い、と握りしめている。

「なんだ……。たった1本しか残っていないのか」

それでも、久しぶりにありつけた煙草であることに間違いはない。オイルも残りわずかなライターで火を灯そうとした。

……。ふと、私のことを凝視しているホームレスに気付いた。彼の周りにはビニール袋と、飛んでいかぬようにと重り代わりになっている石ころ。そして、空っぽになっているのはチキンスープの缶。おそらく小銭の一枚も入れてもらったことがないのだろう。酷く痩せている。

私はこのホームレスの老人を見て、なぜだか一般人が向けるような嫌悪感と言うものが湧いてこなかった。不思議なことに、この人物を心のどこかで仲間だと思ったのだ。

似たようなつらい境遇の身だ。空腹に寒さ。そして通り過ぎていく視線。

体もそうだが、心が痩せこけていく、餓死してくような孤独感。

思わず、1本の煙草とライターを差し出していた。

すぐに受け取らず、ボーっとしているので、その老人の手を取り、煙草とライターを握らせたのだ。

——神よ、私は自らの意志ではなかったと言えども、戦争で罪を犯しました。ですが、この煙草1本分だけでも人の心に喜びをもたらしたならば、私が背負った罪を、煙草1本分だけでも軽くしてはいただけないでしょうか。

すると、老人は自らの手の中にある煙草とライターを凝視して、次に私の眼を見つめた。

その双眸は潤んでいた。

「私に物を直接手渡してくれたのは、あなたが初めてだ！」

突然大声を出したかと思うと、老人は小声で「ありがとう、ありがとう……」と繰り返しながらうずくまり、動かなくなった。

私が彼の手を取ってみると、たった今、他界したことが分かった。

とても、言葉にできなかった。私はしばらく啞然としていた。

私は彼の命は、救えなかった。彼の人生を救えなかった。

だが、もしかしたら、彼の心は救えたのだろうか。

その疑問を胸の内で反芻しているうちに、居てもたってもいられなくなり、走りだした。

「人の命を奪った分、人を助けたい」という衝動に駆られていたのだ。

その場にはいない誰かの声が、自らの頭蓋の内側に強く響いている。

人を傷つけた罪、人を殺した罪。それらは、人を癒すこと、人を救うことで、生涯を懸けて償い続けなさい。大丈夫、あなたならできます。今、ここに一人の天使がいますよ。あなたに感謝の言葉を繰り返している。

大丈夫、自信を持ちなさい。きっとできる。

「一本だけなら」 みやみやみや鋼

一本のタバコのせいだった、僕の人生が狂ったのは。
ある夜の事だ、街のベンチにサラリーマンがタバコの箱を持ったまま眠っていた。
「一本だけなら」と魔がさした。
しばらく、タバコとは無縁だった。無職になってから、我慢していたのだ。
タバコはあと少しで辞められると思った矢先である。
僕は、一本のタバコを盗んだ。
「一本だけなら」
悪魔の囁きだった。
それから、僕は万引き常習犯になった。
「一個だけなら」を毎回繰り返すようになった。
ある日の事だ。もう何の抵抗もなかった。鞆にタバコをしまった所で、店員と目が合った。
捕まった。当然の帰結だった。
今までの罪を洗いざらい話した。一本のタバコから始まり、一箱のタバコで終わったように思えた。
母親は泣いていた。父親は何も言わなかった。
僕は死を選んだ。

「これが僕の人生です、どうぞ裁いてください」
「私は閻魔ではない」
「私の言葉を覚えているか」
はっとした。
「一本だけなら」
「お前は悪魔か」
「人々はそう呼ぶ。お前は完全な悪になる前に死んでしまった。だがこれも計画のうちだ」
「僕は悪人だ」
「そう思うのは真の悪人ではない、足りないのだ。魂のいびつさが。憎悪、怒り、自分が正しいという拘泥、裁かれるよりも裁きたがる身勝手さが」
「僕にどうしろと言うのですか」
「悪になれ。真の悪に。お前が悪いのではない。世界が悪いのだ。窮屈な家に生まれ、歪んだ社会に放り込まれ、残された希望を掴んだら犯罪者扱い。お前になにも与えられない」
「そうだ。でも、僕も悪い」
「復讐したくないか」

「そうして私は悪魔になったのだ。ただし私は悪ではない。恵まれた人々が私を悪魔と呼ぶのだ。私の計画を邪魔するな。お前は何者だ」

「出会うのが少し遅かったようじゃ。お主には見えないのかな」

「これは、私が貶めてきた人々じゃないか。一言囁いただけだ。世界を壊すためだ」

「この青年は盗みを働いた。お主のせいじゃ」

「そうとも、何が悪い」

「誰かに似ているのう」

「見たくない、見たくない」

「見てみるのだ、続きが違う。私のところに贖罪に来たのだ。彼は変わった」

「だからなんだ」

「希望が持てないか」

「私も、このようになれていたら……。でももう遅い」

「遅い事なんてないぞ、今からでも間に合う」

「悪が、救われてはいけない」

「私が許したのだ。さあこの呪文を読み上げなさい」

お題 カレーライス

「半分この後味」 不動心りんご

俺と弟の藤太で外食に出かけていた。といっても華やかなものではなく、単純に母親が出かけているため『お昼ご飯は外で食べてきなさい』と書置きがあったからだ。

十八の俺と、十五になる藤太の二人のことだから、言うまでも無く食べ盛りだ。そのことも配慮してくれたのか、母は机の上に多めの外食費を置いてくれていた。有難い限りだ。

二人で来たのは近所の定食屋。労働者の客で店内はにぎわっている。働く者は、モリモリ食べなくてはならない。近頃テレビやインターネットでは、肉食文化をやめようという活動や、それに伴った新しい食事の方法を目にすることも多いが、労働者が肉を食わないでどうするんだ、と俺は思う。労働者に限った話ではない。動物性たんぱく質を摂ってこそ、与えられたものは何でも食べてこそ、人間の体はうまく動くようにできているのではないのか。

そんな食べ盛り代表の葛藤を燃え上がらせていたところ、早速、店員のおばちゃんが単品の唐揚げを持ってきてくれた。

「おまちどうさま」

「どうも」

藤太の注文したとんかつ定食はまだこない。俺が他に注文した魚フライ定食も、まだ後のことだろう。

「おい、藤太。お前、二個食って良いぞ」

「え、いいの。ありがと、いただきまあす」

ガツガツと揚げた鶏肉に齧り付く姿は、とても幸せそうだった。

「お前が小さい頃も、この定食屋にはたまに来ていたよな」

「俺が子供だった頃の話はやめてよ」

何を言っているのか。今も子供じゃないか。

……なんてツッコミを入れようものならムキになることが見えているので、自重した。

「おまちどうさま、とんかつ定食と、魚フライ定食ですねえ」

『ありがとうございます』

二人して揚げ物の定食。男は茶色い食べ物が好きだ、とよく言われる。それが本当かどうかは置いておいて、今はこの出来立ての食事を有難く頂こう。

「なあ、藤太。フライひとつやるから、とんかつ一切れくれないか」

「おう、良いよ」

このやり取りは、まるで学校の遠足で弁当のおかずを交換する子供だ。

平穏な日常があるからこそできる食の豊かな情景だろう。

「はぁ、食った。もう少し腹に入りそうだけどな」

「ね、もうちょっと食べたい。せっかく久々の外食だし」

「んん、残りは八百円か。んじゃカレーライスを注文して、二人で分けようか」

「なんか、昭和のドラマか映画に出てくるワンシーンみたいじゃん。貧しい兄弟が一人前のカレーライスを分け合って食べる……」

「貧困どころか飽食だけどな」

という訳で、おばちゃんに追加のカレーライスを一人前頼んだ。

テーブルに出されるまでの間は、なんとなくスマホをいじったり、食べる前に撮った写真を友人達や両親に送信したりしていた。

カレーライスが出されると、分け皿も一緒に用意してもらえた。

本日の昼飯。単品の唐揚げ。とんかつ定食。魚フライ定食。カレーライス。

二人揃ってお腹いっぱい食べられることに心から感謝し、腹を撫でながら帰宅した。

分け合って食べたからか、カレーの後味はあまり辛さを感じなかった。それどころか、どこか優しい気持ちにさせてくれるのだった。

「カレーライス」 みやみやみや鋼

カレーライス、泣きながら食べた。

家族はみんな泣いていた。

二度と繰り返さないように、僕たちは固く天に誓った。

僕の話しよう。

ある日のことである。

妻と大喧嘩した。

心の線がぶつんと切れた。

今まで頑張っていた仕事も、頑張れなくなった。

翌朝電車に飛び込んで、気が付いたら病院にいた。

「父さん、父さん」

目覚めると息子の声がした。妻の声はなかった。

俺の話しよう。

ある日のことである。

両親の大喧嘩にうんざりして、家出した。

できるだけ遠くに行こうとした。

片道切符で北へ向かった。

夜になった。駅は閉まった。

暗くなった街で一人。雪が降る。

僕は後悔した。

寒くて死にそうだ。

死ぬつもりだった。でも死ぬのが怖くなった。

地面に横になる。

寒い。

「お兄さんそこで何やってるの」

たまたま通りがかった警察に保護され、自宅へと返された。

家の前には県警が待っていて、引き渡されることになった。

「今すぐ病院に行きますよ」

私の話をしよう。

ある日のことである。

私は夫と大喧嘩した。
二度と顔を見たくないと思った。
翌日、殺そうと思い、包丁を買った。
家に帰ろうとすると家の前に警察がいたので、ぎょっとして逃げた。
川に買った包丁を捨てた。
家に帰るとまだ警察がいた。
要件は、夫のことだった。
病院に向かう途中、怖くて家に引き返すようタクシーに頼んだ。
これは呪いだ。どんなふうにも顔を合わせればいい。
家の中をうろうろした。
そうだ、今日はカレーライスにしよう。
スーパーへ買い物にいった。
具材を買って帰ると、家に息子と夫がいた。
皆黙ってしまったので「今日はカレーライスよ」とだけ声をかけた。
泣きそうだった。

夕飯までみんなバラバラだった。
すごくお腹がすいた。
「ごはんよ」と夫と息子を呼んだ。
食卓を囲む。
「いただきます」の声のあと、皆は無言で食べ始めた。
息子が言った。
「おいしい」
父が返す。
「おいしいね」
「ありがとう」
涙が出た。
「何泣いてんだよ」
父は笑ったと思ったら泣いていた。
みんな泣いた。みんな笑った。
カレーライス、泣きながら食べた。
家族はみんな泣いていた。
二度と繰り返さないように、僕たちは固く天に誓った。

お題 馬

「役目を終えた時」 不動心りんご

我が同胞達は、皆が散り散りになってしまった。鼓角の音も鳴ることが無く、ただ秋の冷気が吹き荒ぶ。

騎兵隊の一人であった私は、今しがた世を去った戦友に野の花を手向けたところであった。

さて、これから私は、一体どうしたら良いものか。

敵軍に下るつもりはこれっぽっちもなかった。ここから東の丘を越え、旧帝国時代の城跡を隠れ蓑にして、国王にこの敗戦を知らせに走るべきか。

「ふ、ふふふ……。負けてなお、忠義と言うものは厄介だ。私の仕事を増やすではないか」

それとも、このまま日が暮れるのを待ち、影に身を寄せて西へと進み、暗い森に潜んで敵をやり過ごすか。

南方の大橋は同盟でない君主の支配下であるし、敗残兵の私は、まず通れないだろう。北方には勝鬨に燃えている敵軍が待っている。

いや、もう良いのだ。栗毛の軍馬よ、お前も疲れただろう。今、鞍を外してやろう。

身軽になった馬は、大きな声で嘶くと、私のひげ面に顔を摺り寄せて、名残惜しそうに何かを語りたがっていた。

「良いんだ。良いんだよ。お前はもう自由だ。よく頑張ったな、人の世の身勝手な戦につきあってくれてありがとう。自由に生きなさい。良い相手を見つけて、丈夫な子を産んでもらいなさい」

栗毛の馬は私の願いが通じたのか、何処かへと走り去っていった。

私の戦はもう終わったのだ。私達は負けたのだから、馬にまで悲しみや苦痛を背負わせる必要も道理も無いではないか。

馬は古来より天の使いと言われている。

天使を野に返した私には、多少の救いが与えられるのだろうか。

古の会戦より幾星霜。この東西南北を繋ぐ、今や誰も通ることのない草生す街道。

毎年秋を前にして、栗毛の馬の群れが幾つも集まり、この地の草を食むという。

「馬、人、星」 みやみやみや鋼

ヒヒンと馬が鳴く。ここは川のほとり、人も馬もごくごくと水を飲むのであった。
さて、私の話をしよう。私はこのキャラバン隊のキャプテン、タケルだ。
キャラバン隊はいくつもあるが、このキャラバン隊はただのキャラバン隊ではない。
夢があるのだ。

今日もガラクタを集める。四角いパネル、円筒状のパーツ、キラキラしたケーブル。
「べつにあげても構わないけど、こんなもの集めて何になるんだい」
「お客さん、これはね、まだ使える可能性がありますぜ」
「こんなものもう使えないよ」

君は知っているかい、馬という動物も、我々人類も、どこから来たのか。
地球って知っているかい、この星のことじゃないよ。
昔むかし「地球」を出た人類はここを目指したらしい。
僕たちの先祖は故郷を離れ、故郷と同じ暮らしを目指したのだ。
でもうまくいかなかった。
機械は壊れた。
でも馬と人は壊れなかった。

水を飲み終わった馬は空を見上げた。本能が故郷を知っていた。
人も空を見る。本能が故郷を知っている。
いつか帰ろうと思うんだ。僕の代、または次の代、または次の次の代……。
次の町に向かう。新たなガラクタが待っている。
次の町でも語り合う。
「夢があるんだ」

お題 弾丸

「隊のもっとも悲しい日」 不動心りんご

塹壕が何処までも続く戦線。夜中には時折、敵陣から照明弾が打ち上げられる。無人地帯を煌煌と照らす姿は美しく、同時に残酷だ。

いつも活気がないのは、そりゃ当然だ。この戦争を楽しんでいる人間は、前線には一人もいない。

だが、いつにも増してここが暗くて重い空気に包まれているのには訳があった。

先日、同じ小隊から軍規に反するものが現れた。

そいつの名前は……仮に A としておこう。当時、俺達を含む二十三人が、敵の捕虜四名を拘束していた。彼らは武器を持っていない状態で、怯えた目で命乞いをしていた。

俺や他の隊員は、自分の水筒を手渡して水を分け与えた。それぐらいは、赦されるはずだった。

捕虜達は、こちらの母国語を真似して「ありがとう、ありがとう」と言ってくれていた。……なぜ、戦争なのだろう。

そのような疑問を持つことも赦さないかの様に、後方から視察に来た少将が、捕虜の手にある水筒を蹴飛ばした。

隊の全員が、胸の内に言い表しようのない不快感を抱えた。

少将は、この捕虜達を「戦意高揚」のために銃殺しろ、と命じた。その際に、我が隊の四名を指名した。そのうちの一人が、A だった。

逆らえるはずも無かった。三名はその小銃を用いて、三人の捕虜を撃ち殺した。

せめてもの情けと思ったのだろう。彼らは頭を撃たれていた。苦しむ時間もなかった事だろう。

ところが、捕虜はまだ一人生きている。A は武器を手にとらなかった。

少将が A を指さしてきつく命じた。「捕虜を殺せ」と。

A は毅然たる態度で胸を張り、大声で言い放った。

「私は捕虜を殺しません。こんな人の道を踏み外した命令には従えません」

少将の口から三度目の命令は出なかった。彼が拳銃を抜くと、最後の捕虜も銃殺された。

そして、A に対して銃殺刑を言い渡して後方へと消えていったのだ。

夕方になった。俺達は今、今生でもっとも悲しく、もっともつらい仕事を控えている。

他の隊の者に対して怨みを持たぬ様に、銃殺刑の際には同じ隊の兵士達が、その「執行人」を任されるのが軍の掟だった。

俺を含む五人が、その役目を小隊長から任された。泣いている者は一人もない。今泣いてしまったのは、Aの勇気に対して無礼だ。

目の前には、杭に手を結ばれたAがいる。白い目隠しをされる前に、彼は悲しくも微笑んで見せた。俺達に対してだ。

小隊長が「装填」と言う。次に「構え」と叫ぶ。

俺達は全員、英雄の心臓を狙っていた。微塵たりとも苦しませたくない。せめて……。

小隊長が「撃て」と命じた。一斉に鳴り響く発砲音が、あまりにも悲痛であった。

白いシャツを胸元から真っ赤に染めたAのもとへ、小隊長が歩み寄る。死亡が確認されたのだ。

俺は、この戦争を生き延びるかどうかは分からない。

名も無いまま生きて、名も無いまま死んでいく定めならば、どうせなら、平和な時代に生まれたかった。

だが、この勇者の亡骸を前にして、その様な我が儘を持つことすら失礼であると、俺の魂が呼応していた。

さようなら、親友。

「弾丸」 みやみやみや鋼

発砲音がした。

弾丸が私の頭を貫く。

私は幼いころ一つの弾丸をもらった。父の形見だ。これは父を貫いた弾丸である。

先の戦争で父は英雄だった。父は軍人であった。決して人殺しが好きではなく、貧しさゆえに軍人になったことは添えておく。

それでも国のために戦ったのだ。父は勇敢で無敵であった。先の戦争では劣勢だった戦線を支え、友軍の反撃まで持ちこたえた。

しかし、戦争が終わるまでその勇敢な男は生き残れなかった。敵に撃たれたのではない。味方の誤射によるものだった。

父は誤って撃った味方に怒らなかった。それどころか、摘出された弾丸をその味方に託して死んでいった。

戦争が終わって、その兵士から私へとその弾丸は託されたのである。

何が悪いのか。その兵士か、否。貧しさが悪いのだ。

戦争で金持ちはどんどん肥え、貧しき民は死ぬか、もっと貧しくなる。

私は盗賊になった。決して己が利益のためではない。戦争で儲けた金持ちから、戦争で家族を亡くした人へ、正しき所へお金を返すのだ。

盗賊団はどんどん大きくなった。その多くが戦争で父親を失い、貧しさに明け暮れる者であった。

殺した金持ちの数はもう覚えていない。指名手配。私はもうじきだめみたいだ。国には勝てない。しかし、富は十分再分配された。ほとんどの団員は「普通」の生活に戻っていった。

最後のミッションだ。

狙いは元大統領。彼は天才で、冷酷で、しかし支持を得るには十分なカリスマであった。

車の中で最後の弾丸を装填する。

父さん。僕は……。

目的地に着き、車を降りた。すると茂みから銃を構えた警官が複数現れた。

「くそ、内通者か」

とっさに銃を抜こうとしてしまった。

発砲音がした。

弾丸が私の頭を貫く。

私は世界の敵であった。世界は私の敵であった。

これでよかったのか、分からない。
長かった。父と同じところに帰るのだ。

お題 F P S

「楽しいFPS」 不動心りんご

ゲーム内のボイスチャットを使い、いつもの三人で通話を始めた。

俺達はFPSが好きだった。伊藤も、木村も。

直接の撃ち合いよりも、仲間を支援することが好きな俺はいつも工兵を選択している。

木村は戦闘そのものは得意だが、同時に治療行為が好きなようで、よく衛生兵を選ぶ。

伊藤は……俺と木村から言わせれば、次々とキルを稼いでいく武者だ。彼が選択する兵科は、ほぼ重装歩兵だ。

この三人で広い戦場を東西南北、走り回る。時には装甲車で。時には主力戦車で。またある時は、同じ遮蔽物に身を隠しながら反撃の時を待つ。

俺がこっそり弾薬箱を用意して、二人は弾薬を確保する。

木村が治療道具を用いて、全員の損耗した体力を回復してくれる。

伊藤が軽機関銃の引き金を引き、周囲の敵にけん制射撃を続ける。

この様な休日の過ごし方が、たまらなく好きだ。

三人は戦争が好きなのではなく、FPSという試合が好きだ。だから、時には味方陣営のみならず、敵陣営の上手いプレーにも敬意を表する。

「お、今の狙撃はうまいな。ここは見られているから屋内に移ろう」

重い一撃を受けた俺は二人と共に占拠エリアに入った。木村がすぐに治療を施してくれる。

『迷彩服を着ていない敵だったね。かなり自信があるのかな』

と木村が考察する。

『わざと目立っているようにも見えた。身を隠さず丘の上から撃っているし』

と、観察していたのは伊藤だ。

「とにかく厄介だな」

すると、占拠エリアの北西からエンジン音が聞こえてくる。

「この音、装甲車！　ここを奪いに来たぞ」

『やってやろうぜ』

伊藤が身を乗り出す。音がした方角の通路を見張っている。このエリアには通路が三つある。どこから何人が攻めてくるかは分からない。

俺は威嚇の意味も含めて、反対側の通路に機銃を設置しておいた。

木村はどの通路からも視認しにくい遮蔽物に身を隠す。ちゃっかりと治療道具を構えているのが分かる。気の利く男だ。

突如、発砲音が鳴り響く。けたたましい騒音が十数秒続くと、不気味な沈黙が流れた。

「仲間が来てくれたのか。連中と撃ちあっていたみたいだ」

その後の静けさは、あまりにも長かった。仲間も来ない。敵も来ない。外で何が起きたのか分からないまま、俺達は戦闘に備えていた。

そろそろ動き出そう、と三人の意見が一致したので、警戒しながら屋外へと身を乗り出す。

連続した発砲音。全員そろってやられてしまった。

「うそ、三人そろってヘッドショット受けた？」

『あ……すっかり忘れていたね。丘の上のスナイパー』

『だな。もう居なくなっていると思ったんだが』

すると、その狙撃手からクイックメッセージが届いた。

『仲が良さそうで、ちょっとうらやましい』

「……この人に、皆でフレンド申請を送ってみるか」

昨日の敵は今日の友。

「銃を置くまで」 みやみやみや鋼

僕はFPSゲームが嫌いだ。

FPSゲームは一世を風靡した。チームを組んで撃ち合い、勝てば喜び、負ければ悔しがる。上手くなれば勝率は上がる。

しかし、僕はFPSゲームが嫌いなのだ。

「シュウト、FPSゲームやろうぜ」

「勝ったぜ。シュウト、ありがとう」

「負けちゃった。シュウト、またやろうな」

FPSゲームをすると、親友だったニックを思い出す。

あの頃は楽しかった。FPSゲームが好きだと思っていた。

勝っても負けても楽しかった。

あの日までは……。

「俺、戦争に行くんだ」

「心配すんな、FPSで鍛えた腕でプラチナ行ってやるぜ」

「またな、シュウト」

それ以降、ニックと連絡が取れなくなった。

気晴らしに、FPSゲームを一人でやった。

つまらない。気晴らしどころか、どんどん気持ちは暗くなった。

それでも僕はFPSゲームを続けた。

前よりずっと強くなった。

そして、僕はある境地に達したのである。

心は戦いに燃えた。

敵を撃つ。ニックが戦場で戦うように、僕はここで戦う。

ニックが銃を置くまで、僕は銃を置かないと誓った。

僕は戦争が嫌いだ。

僕はFPSゲームが嫌いだ。

だから僕はFPSゲームを辞めないのである。

お題 潜在的恐怖

「恐れと畏れ」 不動心りんご

昔々ある所に、人々が恐れて近寄らない森林がありました。
その森はいつからか『黒い森』と呼ばれていました。
その奥深くへ踏み込んだ者は、一人もいません。ですから、その深い深い森の奥に何が潜んでいるのか、答えを知る者はいません。
それなのに村人も、町の役人も、軍隊も、王様も、誰もが恐れて近寄らないのです。
ならば、森を手前から切り開いてはどうか。
いやいや、いっそのこと森を焼き払ってはどうか。
誰かが一度は思い浮かべた事でしょう。
しかし、誰もがそれを愚行であると直感的に気付いていたのです。
人が足を踏み入れない、陽の光が届かぬ場所。その様な場所は、決まって魔の巣窟という言い伝えがあります。
つまり、この黒い森が存在するからこそ、人間が暮らす世界に多くの魔物が溢れかえることなく、大人しく自分達の巣窟で暮らしているのだ、と人々は考えていたのです。

黒い森に面した村の外れに小屋がありました。そこには、村の皆から馬鹿にされてきた大男が暮らしていました。
彼は生まれつき学習に困難を抱えており、村の中での決め事や約束事を頻繁に忘れてしまいました。彼は、生前の父や母から繰り返し教わったことがあります。
『絶対に、黒い森に入ってはいけないよ。あそこには魔物の世界が広がっているんだよ』
しかし、大男は薪割の報酬でもらった蜂蜜酒を飲みすぎて酔ってしまい、つつい楽しい気分で歩き回っていると、いつのまにか暗い森の奥深くへと入ってしまったのです。
大男には幼い頃から、あの森を怖いものだという認識がありませんでした。
彼から見れば、ただ背の高い木が沢山あって、多くの鳥や獣が暮らしていて、村よりも静かな場所だ、という印象だったのです。
ですから、彼はお酒に酔った事による気分の高揚と、元から恐れを抱いていなかった事も相まって、一人で森の奥へと入ったのでした。

村人達が異変に気付きました。どこにも、あの大男がいないのです。
「おい、もしかしたらあの馬鹿、森へと入ったんじゃないか」

「ああ。もう助からねえなあ」

村の人々が口々に諦めを呟いていると、どこからともなく鼻歌が聴こえてきます。

楽しそうに大手を振って、森の奥から姿を現した大男。村人達が一斉に群がり、質問を重ねました。

大男は見てきたものを正直に語りました。

「森の奥に、悪魔とか怖いものなんて、何もいなかったよお。ただ綺麗な川や野イチゴ。それと多くの鳥達が楽しそうに歌っていただけだよお。ああ、あと小さな動物もいたよお」

そして次の様に付け加えました。

「あれは神様の国だあ。間違いねえ、おらには分かるんだあ」

その話を聴いた人々は「黒い森は魔物の巣窟ではない。人間にとって豊かな物資に満ちた区域なのだ」と一斉に開拓の準備を始めました。

ですが、大男は必死になって止めました。

森を傷つけたら駄目だ、あそこは神様が暮らしている場所なんだよ、と。

しかし、物欲に目がくらんだ人々はそんな忠告に耳を貸す筈も無く、黒い森は短い期間であつという間に跡形も無くなりました。

人々が森で仕留めた獲物の肉や木の実や山菜等で御馳走を作り、大きな宴が始まりました。

しかし、大男はその宴を無視して、かつて森があった場所へと向かい、独りで跪きました。彼は祈り方も知らないのですが、ガタガタと震える両手を握りしめ、涙声で懸命に祈りを捧げているのです。

「神様、森の神様、どうか、皆の事を赦してあげてください。森の神様が暮らしている楽園を、皆が壊してしまったことを、どうか、神様の愛で赦してあげてください。黒い森が本当は怖くないという事を、皆に教えてしまったおらを、どうか、どうか、赦してください」

彼の祈りは静かでした。それはまるで、在りし日の黒い森の、息吹の様でした。

「宇宙人の証拠」 みやみやみや鋼

私は宇宙人がいると知っている。しかし、この話をすれば、皆ただの勘違いだと言って否定するのだ。

その度に本当にむしゃくしゃしてならないのだ。君もこの話を聞きたがるのは勝手だが、反応には気を付けたまえ。

ある日、夜遅くに駅から自宅まで歩いていた。その道の途中で、消えかけの街灯がちらちらしていたのである。

その根本に立方体が落ちていた。おもちゃかと思って拾うと、重そうな見た目に対して軽すぎるのだ。それをコンコンと叩いても、空洞の気配がしない。

「拾って下さったのですね、ありがとうございます」

突然声がしてびっくり振り向くと、サラリーマンのような男がいた。右手を出してきたので、無意識に立方体を手渡した。

男は右腕に腕時計をつけていたので、反対の手をチラッと見るとそちらにも腕時計がついていた。

街灯が点滅するたび、両腕の腕時計が変に目立って見えた。

「ありがとうございます。それでは」

男が振り返った瞬間、光に照らされた右の腕時計は、1時を指していた。

慌てて自分の腕時計を見ると、11時であった。その時は何とも思わなかったのだ。

空を見ると赤と緑に光ったものが飛んでいくのが見えた。

「ここを飛行機が飛ぶのは珍しいな」

今振り返れば、あの飛行機は、ジェットの声が全くしていなかった。

すぐ家に帰って洗面所で鏡を見たら、時計が鏡に映るのが見えた。

このとき、はっと気づいたのである。

宇宙人は存在する。

お題 歓び

「歓呼の歌声、届けこの声」 不動心りんご

町の通りという通り全てに人が押し寄せている。

今や戦禍は去り、この首都の生きとし生ける者が、凱旋の勇者達を称えている。

綺麗なブーツ、磨かれた鉄砲、輝かしい鉄兜、洗濯された軍服。

シワの寄った笑顔に白い歯。胸元の勲章。

兵隊さん達は皆、生きて帰ってこれたことを喜んでいるのか、それとも何か、胸の内の離れない『何か』を振り払うために、目の前にある華やかな情景を刻もうと必死になっている様に思ってしまう。

暗い陣雲が立ち込めていた戦時中とは対照的に、今は表向きだけが、上辺だけが晴れていて心が曇っている。その理由を、私は少し知っているかも知れない。

私とお爺ちゃんは、手を繋いだままこの都市を後にした。一応、終戦のお祝いにと、赤い葡萄酒を一本だけ買って行った。

静かな農村に、凱旋の列は続かなかった。

この村の出の者達は、すべてその数六十五人。開戦と同時に、あの若者達は声を揃えて立ち上がった。

『お前だけ英雄にさせてたまるか、俺も行くぞ』

『兄さんがいくなら僕も行くよ』

『俺達の国だ、俺達が護るぞ』

『私がいけない間、子供達を頼む』

皆が真っすぐな瞳をしていて、真っすぐな心で里を発った。

そして、曇天の下で人として扱われなくなり、塹壕と鉄条網、身を引き裂く銃砲弾の嵐、冷たい雨と泥濘の地獄で命を落としていった。

町は華やかなパレード、お祭り騒ぎが続いたけれども、勇者が一人も帰ってこなかった、この農村の静けさを秋の虫が代弁している。

悲しくて、虚しくて、悔しくて、戦争に勝ったか負けたか、どうでも良くて。

命あってこそその人生であることを、今生を生きている私達が代わりに嘯みしめている。

残された命、残された者達。

この先も幾ばくかは続くであろう灯を抱えて、先に戦地へ散った息子達、兄達、弟達、夫達の御心を照らしたい思いで胸がはちきれんばかりである。

国中で響き渡るのは歓呼の歌声。

負けじと叫ぶ、届けこの声。

「自由と喜びと」 みやみやみや鋼

今日も賛歌を合唱した。といっても何の賛歌か分かっていない。とりあえず聴いてもらおう。こんな歌だ。

——
栄光と行こうハレルヤ
栄光と行こうハレルヤ
栄光と行こうハレルヤ
主の真理は行く
——

ハレルヤってなんだろう、「主」って誰だろう。色々な疑問が湧いてくるのである。

時は 4022 年、僕の国が二つに割れる戦争が起こった。どうやら僕たち奴隷が関係した戦争らしい。ただでさえ厳しく畑で働く僕たちが、これからどうなってしまうのだろう。

ふと口ずさむ
「栄光と行こうハレルヤ、栄光と行こうハレルヤ」
天が鳴った。稲妻か砲声か。

今日もかたいベッドで眠る。今日は夢を見たみたいだ。
古代の銃を持った兵士たちが戦っている。どうやら自由のためらしい。
自由ってなんだろう。
兵士が血を流す。
天が光る。
天から声が聞こえる。
「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」
ぼくは叫んだ。
「やめてくれ、何のために争うんだ」
全身に響く声が聞こえた
「あなたの街も今夜戦場になる。ベッドの下に隠れなさい」
ドカッとベッドから落ちて目が覚めた。
銃声がする。現代の銃の音だ。はっとしてベッドの下に潜った。
天が光る。
天から声が聞こえる。

「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」

お題 海

「少年と海の神様」 不動心りんご

潮騒の音で目を覚まし、蠟燭の火が消えた薄暗い小屋のなかで瞬きをする。
隙間から入り込む、噓せ返るほどの磯の香り。
僕は今日も、朝食を用意するため鉈を手に取り、浜に出かける。

椰子の木がぶら下げている実を、慌てて取る必要は無い。木の下に落ちている実をひとつ、胸にとって抱きしめる。流木と椰子の葉で作った日よけの下に腰掛けると、僕は嬉しいことに今日もご飯にありつける。

鉈で実の堅い部分を割り、中から溢れる水分を、喉を鳴らして飲む。胃袋に貯まる微かな甘みが、いつもの味ながらも美味しいと思わずにいらなかった。

その後は、実の内側の白い塊も食して、これで今日も一日、僕は働けるのだ。

島の中央にある岩の座に向かう途中、豊かな色の花を幾つも見かける。花を手折って、束を作り、また手折って束を作り……。この繰り返しの内に、僕の両手いっぱい花束が出来上がる。

猫のような鳴き声の白い鳥達が空を飛び交い、僕は彼らに励まされて、やっと岩の座に辿り着いた。ここは、島の中でも一番高い位置にある。

「さあ、神様にお会いする前に服装を正さなきゃ。きちんとお香を焚かないと」

僕は両手に抱えていた花束をひとつずつ、岩の座の前に並べた。花卉の向きは、きちんと太陽が沈む方角へと向けて揃えた。

ローブをしっかりと着直して、お香を焚いて邪気を払う。

祈りを始める前に、幼い頃から教わり続けてきた戒めを音読する。

海に生かされていること。海が人々に生きるための恩恵を与えていること。

海には神様が暮らしていること。海の神様は怒ると怖いということ。

それでも海の神様は慈悲深いこと。いつの世も人々がそれを忘れてしまうこと。

海の彼方にある大罪の国の穢れを、僕が代わりに清めていること。

そのためには孤独にも耐えなくてはならないこと。

そして、全てに感謝すること。

音読を終えて海の神様への祈りを始める。

十分、二十分、三十分……。たった一人でも、孤独に想うことは無い。

僕がこの島で祈るという事は、神様と一体になるということだから。

すると、不思議なことに目の前の花束がひとつ、宙に浮かんだ。

僕は祈りを続けたまま、その花束をよく見ると、少しずつ神様の姿が目映るのが分かった。

「坊や、もう良いんだよ。今はお祈りを止めてよろしい。私と話をしよう」

「は、はい。神様、僕に何か御用でしょうか」

神様は花束の美しさに喜び、ひとつ訪ねた。

「うむ、美しい。君には良い花を見極める目がある。この小さな島を離れ、大勢の人間達と関わりながら生きれば、花屋を開き、人々を花の香りや美しさで幸せにするお仕事ができることだろう。だが、君の今の立場は分かるね」

僕は迷わず応えた。

「はい、海の神様のために、人々の穢れを清めることです」

海の神様は優しい笑顔で応じてくださった。

「良いのだよ。君も人の子、即ち天の子だ。この私、人々から海の神と呼ばれる存在に生涯仕えるためにこの島に残されたかも知れないが、人生の舵取りは君が行うべきなのだ。さあ、選ぶが良い。もうやがて、君のご両親が乗った船がこの島にやってくる。君のことを恋しく思って、ここに一人残したことを後悔して、家族一緒に暮らそうと、その夢のために迎えに来てくれるのだ」

僕は思わず息を飲んだ。物心がついてから、この島での信仰に基づいた暮らししか知らない。そんな僕が外の世界に出て良いのだろうか。

でも、お母さんやお父さんに会いたい。その願いは今まで消えた例がなかった。

「さあ、栈橋へ向かいなさい。大丈夫。君はもう十分に、私のために尽くしてくれたね。ありがとう、本当にありがとう。心からお礼を言うよ。君のような心優しい子供が、世界をより素晴らしい姿へと変えてくれるのだろうね」

僕は深々とお辞儀をして、お礼を述べた。

「神様、海の神様、ありがとうございます。今までお世話になりました。僕は家族の下へ向かいます」

そこから先のことは全く覚えていない。栈橋に辿り着いたら僕の両親がいて、僕の名前を読んでくれて、力いっぱい抱きしめてくれたことが鮮明に焼き付いた。

僕がこの島で学んだことは、なんだったのかと問われれば……。

それは神様を敬う心と、自らが世界に生かされているという自覚だろう。

しかし、父にも母にも、海の神様の話をしたけれど、これっぽっちも信じてはくれなかった。

「海と太陽と」 みやみやみや鋼

僕は海の夢を見るのだ。ただ広い海だ。

ゆらゆらと水がどこまでも続く。

潜るとどこまでも深く暗い。

ああ、これが本当の海なのだ。

――

「タロウ、起きて、朝だよ」

今日も姉のミカが起こしてきた。分厚い毛皮の布団から出ると、瓶の冷たい水で顔を洗った。

「今日も狩りだっけ」

ミカは「うん」と言ったが、聞いているのか分からなかった。

朝ごはんを食べるとすぐに出かけた。

空はうす暗く、分厚い雲の上に太陽があるらしい。この太陽の夢も見ることだ。あれもこれも、昔姉が、幼い僕に話してくれたことだった。

しばらく歩くと、地平線まで平らな氷土が見えてきた。

「お姉ちゃん、あれって海だよ」

「そんな訳ないでしょ」

「空の上にあるのは、太陽だよ」

「そんなの嘘よ」

「クジラも、イルカも」

姉が遮る。

「天まで届く大きな建物も、宇宙まで飛ぶそりも、地を覆うほどの人々も、全部おとぎ話よ」

「そうなのかなあ」

今日もウサギを追う。

「いつかさ」

「なによ」

姉が笑うので、何も言えなかった。

お題 かもめ

「鳥に生まれた」 不動心りんご

もしも、私が鳥に生まれたならば、鳥らしく生きたい。

当たり前のことかも知れないが、馬鹿らしく思われるかも知れないが、私にとってこれはとても大事なことなのだ。

普段、意識せず、考えずにいるだけであり、人間とは人間として存在している。

なればこそ、人間らしく生きたいと願うものではないか。

それが常識という霧中に隠れてしまい、人々は、道を違えた過ちを盲目的に受け入れてしまい、これが今の世界を形作ったのではないだろうか。

だからこそ、私は鳥に生まれたならば、鳥らしく生きたい。

鳥と言っても様々な鳥がいるだろう。

空の王者を彷彿とさせる鷲や鷹。小さな雀。百舌鳥。大洋を越える渡り鳥。

私はどんな鳥になりたいだろうか。

つまるところ、私が「どんな鳥になりたいか」と考えることは、私が「どんな人間に成りたいか」と考えることに等しいのである。

私は善人になりたい。良く思われたいのではない。文字通り、良い人になりたい。

人に優しく、謙虚で、争いを生まず、強く無くとも逞しく、生きてみせたいのだ。

そして、もうひとつ我が儘を言わせてもらえるのであれば、私は孤独な生涯よりも、人の心の温もりに触れることのできる人生を送りたい。

鳥が群れて、寒い環境、暑い環境、様々な場所で歌を唄うではないか。

あの鳴き声、歌が、私の祈りを代弁してくれているように感じる。

歌うという事は、周りに聴いてくれる者がいる、ということだ。孤独ではない証拠だ。

確かに、一人で歌うことも楽しいだろう。だが、孤独を抱えている状態では何をしても楽しくない。

「一人」とは周囲に誰かがいてくれて成り立つ。

だが、真の孤独……独りになれば、何もいないのだ。

孤独な私。自由に歩くことも適わず、この村の外れの小屋に閉じ込められ、業病だからと忌み嫌われ、たまに窓から投げ入れられる飯を食る。

すると、鳥の鳴き声は何処からか響いてくる。私の魂を打つのだ。私の嘆きに響くのだ。

私も鳥らしく生きたい。鳥らしく存在できる鳥の様な、人間でありたかった。

ならば、鳥にして差し上げましょう。

その声音は温かく、菩薩様のものであった。私は無学ゆえに、突然姿を現したその菩薩様のお名前こそは分からなかったが、感無量に泣けてしまった。

慟哭に咽ぶ私の肩を撫で、菩薩様は私の姿形を、一羽の鳥にくださった。

生まれ変わった私の鳥としての姿は、まるで御伽噺に出てくるような、火焰鳥であった。

さあ、好きな場所へ向かいなさい。好きな様に生きなさい。

私は菩薩様に答えた。

「いいえ、私はもう満足です。私は業病と言われ嫌われ続けてきました。かつての、動かぬ足ゆえにです。しかし、その足は消え、この美しく燃えるような翼を身に宿し、私の心は、想念は初めて自由と言うものを実感しました。私は幸せ者です。もう、未練はございません。私を仏様の遣いとして、どうぞ働かせてください。人々に希望を与え、闇に光を灯し、終わりは始まりであると告げ、世の全ての孤独な者達に、私が与えられただけの慈愛を配り渡る務めが待っている。私にはその使命があるのだと、今分かりました。私が今まで苦しみ続けてきたのは、ただ自由を得るためではなく、人に優しくなるためだったのです」

菩薩様は涙して、私を小屋から放して下さった。

南斗と北斗の端から端まで。東洋西洋の端から端まで。四海の隅々の全てにおいて働いてください、とおっしゃった。

私は感謝と喜びを胸に抱いて、天のお仕事を始めた。

「北から来たかもめ」 みやみやみや鋼

今年もかもめの来る季節が来た。

しばらく曇天が続き、今日も海は黒くうねっている。

私は故郷からここに移り住み、海の見えるこの役所で仕事をしている。

昼休憩、弁当を食べながら外を見ると、かもめの姿があった。

北から来たかもめ。私も北から来た。

毎年雪が積もり、時には吹雪く、故郷は過酷であった。

雪をかき分けながら列車が来る。

私は旗を持って列車を待っていた。

雪はますます強くなり、ついに列車は来なくなった。

客の姿は元々なく、駅にたった一人。

過酷な職場であった。しかし、あの頃の方が生きている実感が強かったのだ。

雪の中列車が走ってくることが、人生で何よりの喜びだった。

後輩に故郷の話をしたことがあるが、そうですかといった感じで、あまり通じていなかったと思う。

もやもやしていると、後輩の声がした。

「先輩、この前北海道行ったんですよ。先輩がいい所と言っていたので」

「どうだった」と食い気味で聞き返す。

「食べ物が美味しくて最高でした」

「そうか」

「あと、雪の中列車が動いていて凄かったです」

「そうか」

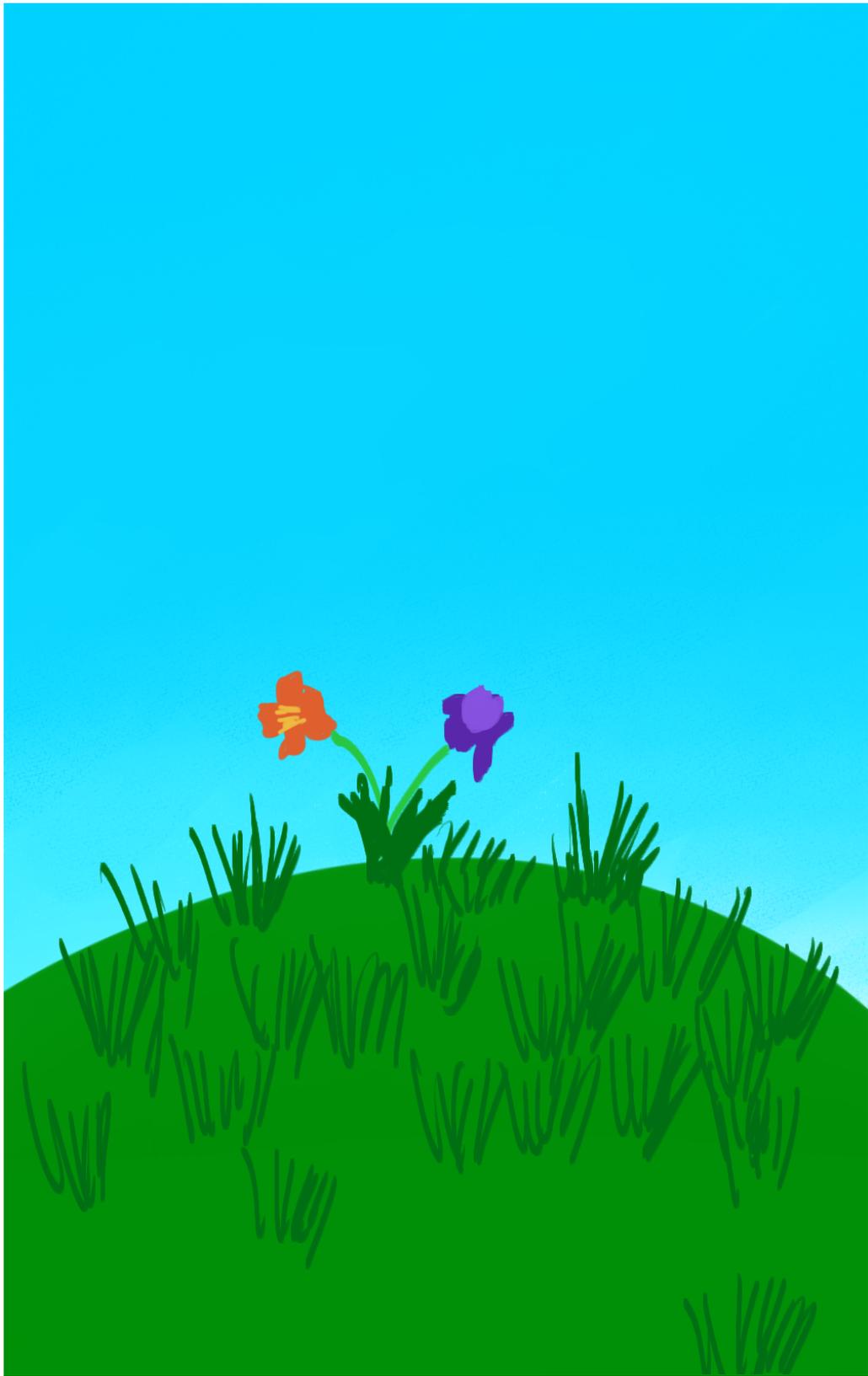
ここも悪くない、と思った。

けれども、夢があるのだ。

北から来たかもめは、北へ帰ってゆく。

いつか私も帰ろうと思うのだ。

終わり



64 e e 36 c 9 2 0 c c 4 daf.png

双筆の短編集

著 不動心りんご
著 みやみやみや鋼

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
